

「御南地区を語る会」について

この会は昭和62年に発足し、メンバーは旧今村在住の有志30名ばかりですので、多くの方には知られていません。このたび本紙編集委員から、この会のことを紹介するよう求められ、この記事となった次第です。そもそも、この会を始めることになったのは、この地区の歴史を知りたいというのが動機ですが、よい指導者がいなければ始まらないわけです。幸い、この地区の方で若い頃から郷土史を研究しておられた元教員の佐藤勲さんや、縁あってこの地区へ来られた元教員の森本賢さんらの参加が得られ、いろいろ教えをうけたり、史跡の案内をしていただいたのです。当初は見学箇所も地区内であったが、「地区外研修」と称して次第に県南の各地に及び、ときには県外を訪れたこともありました。（例：白鬚宮本家の滋賀県の白鬚神社、京都の神楽岡宗忠神社など、この地区にゆかりのあるところ）。

その後、お世話になった森本先生は亡くなられ、佐藤先生も体調をくずされ休養される等、指導者不在の状況となりましたが、地区外研修を春秋2回自主的に継続実施しています。今年の春は時期がずれましたが、6月に東備地方の史跡めぐりをする予定でした。しかし、雨天のため延期しました。その計画の一部を参考のため、つぎにかかげてみます。

矢田部六人衆墓所（佐伯町）……日蓮宗不受不施派信仰のところが
処刑（1668年）された方の墓
田原井堰（和気町）……津田永忠らにより吉井川に設けられ、
1697年に完成した水利施設
田原用水の「石の懸樋」と「百間の石樋」（熊山町）……この用
水の開さくにあたり難所に設けられた施設（1693~1697年頃）
和気神社と芳嵐園及び津田永忠（1640~1707）墓所（和気町）
八塔寺川ダム公園（吉永町）
（世話人代表 中尾 佐之吉）

平成11年4月の人事異動（町内関係分）

- ◆老人クラブ（白寿会）会長 和気 輝明、副会長 原 博志
- ◆御南中学校 校長 伊加 實
- ◆御南西公民館長 楠田 廉
- ◆総合社会福祉センター所長 大守 一男
- ◆西養護学校 校長 山田 貞秀
- ◆御南学区愛育委員会 会長 田中 律子
- ◆御南地区社会福祉協議会 会長 和気 加太志

虫のはなし（1）

ホタルあれこれ

平尾重太郎

ホタルのシーズンはすでに過ぎてしまったが、「蛍の光り窓の雪…」の小学校唱歌は、私のような戦前派にはいつでももなつかしい。この歌のようにホタルの光りで勉強をしたという故事がある。これはまんざらウソではなく、ホタルを千匹も集めると、新聞ぐらいならく読めるそう。また、停電のときは200匹も集めると、物につきあたらずに家の中を十分に歩けるという。最も明るいゲンジボタル1匹の明るさは、5千分の1燭光前後といわれている。

ともかく、浴衣にウチワ姿で幻想的なホタルの乱舞を楽しむのは、初夏の夕べの風物詩である。近年、河川の改修や環境悪化で、一度失われたホタルの生息地を再生させ、再びホタルの乱舞が見られるところも多い。今夏、県内のホタル情報はことのほか多かったようである。そのなかで、後楽園でもホタルが見られるようになったとのこと。私は平成年代の数年、県都山口市に住んだことがあるが、ここではなんと市のど真ん中、県庁前の「一の坂川」で、毎年6月にはホタルが見られ、市民の憩いの場となっている。県庁の前でホタルが見られるのは、山口のほかにはないだろう。これはホタルが住めるよう、護岸の改修に工夫を凝らし、草も繁茂させてホタルを放したところ定着し、昭和40年代半ばから昔のようにホタルが見られるようになったのである。

ホタルは私たちに最も親しみのある虫で、日本には約40種のホタルがいるが、そのほとんどは陸生であり、なかには全く光らない種類もある。発光ではゲンジボタルとヘイケボタルが両横綱で、両種とも日本固有の種で、幼虫期は水中で生活する特徴がある。ゲンジボタルの一生はどうかであろうか。

初夏の6月シーズンが過ぎる頃、成虫は日が経つにつれて発光も徐々に弱くなり、水辺のコケ類に集まって草に卵を産む。成虫の寿命は10~14日で、この間平均約300粒産卵する。卵は約1か月間で7月上旬にふ化し、幼虫は水に入ってカワニナの稚貝を食べて生育する。幼虫は日陰を好み、11月初めまでに5回脱皮し、翌春4月までの約9か月間水中で生活する。幼虫期には1匹の幼虫が100~150匹のカワニナを食べる。

幼虫は大きくなって4月には光りはじめ、暖かい夜発光しながら一斉に水から上陸する。私はまだ見たことはないが、上陸の光景は山頂より夜の街、百万弗の夜景を眺めるようだという。幼虫の発光は水中より陸に上がれば急に強くなり、新月であれば30分離れても十分わかるそうだ。

上陸した幼虫は土中に潜る場所を探して、深さ3~5センチの土穴を作り、その中で約1か月間過ごして蛹（むす）になる。この蛹も青白い光を出す。土中から見えない。約2週間で5月中旬から6月上旬にかけて成虫になるが、土穴で2~3日間静止し、その後地上に這い出す。

成虫は日中水辺の草の陰に住み、夕暮になると発光しながら飛び立って乱舞し、10時過ぎになると活動が鈍って発光しなくなる。そして、翌日夕暮になると再び発光しながら飛び廻る。オスは絶えず発光して飛び続けるが、メスは交尾が終ると川の水辺のコケ類に集まって産卵する。

ゲンジボタルは卵・幼虫・土中の蛹も発光するが、成虫の点滅発光と異なり、幼虫などの発光は継続的である。この発光は外敵に対するおどしではないかとされている。発光している幼虫は足音などをたてると光を消し、再度発光するには時間がかかるという。一方、成虫の飛しよう発光は、仲間同士の会話であるが、草の葉などに集まっているメスは、オスとは異なる発光パターンで、飛んでいるときよりもゆっくり発光する。これは交尾のためオスを誘う発光といわれている。

とくに、ゲンジボタルは発光が明るい。オスとメスでは明るさが異なる。メスは腹部5節のみが光り、オスは5・6節の2節が光るので、当然オスのほうが明るい。光には熱がないので、冷光という言葉がピッタリする。

ところで、ゲンジボタルの発光周期には、西日本と東日本で異なる。西日本では2秒に1回、東日本では4秒に1回発光する。すなわち、せかせか型とゆっくり型である。また、東日本のゲンジボタルは発光のピークが7時45分であるのに、西日本では8時30分で、両地方でズレがある。このような違いは光の方言といわれ、その境界は糸魚川（新潟県）-静岡を結んだ線であるという。

むづかしい話になるが、最近の研究によりホタルの発光のメカニズムがわかった。すなわち、発光酵素「ルシフェラーゼ」と体内色素である「発光素」が反応して発光する。この発光酵素1mgを得るには約10万匹のホタルのお尻から抽出しなければならない。ところが、バイテクにより大腸菌に発光酵素遺伝子を組み込んで、量産できる技術が開発された。食品メーカーでは、この酵素を用いて発光試薬を作り、この試薬をビールや弁当など食品中の細菌の検出に使う研究が進められている。従来のように菌を培養するよりも、試薬を使う方法は検出のスピードをたいへんアップしたという。ホタルは、発光乱舞により人の眼を楽しませるばかりでなく、人の生活にも役立っているわけである。